

地域における子育て・学習運動

家庭・地域・学校がつながり、子どもが育つ地域をつくる

若原幸範

今年度は持ち込みを含めて八本のレポートが集まった。分科会一日目から二日目午前にかけて各レポートの発表と簡単な質疑をまとめて行い、最後に総括討論を行った。

一 レポートの発表から

1 「福島原発事故からの避難者家族と子ども支援にどう向き合ってきたか」

北海道子どもセンター 原田 勇

福島原発事故の避難者支援に取り組む「厚別・白石子育てクラブ」の、活動三年目を迎えて浮かび上がった課題と展望が報告された。

最近になって見られる被災者の変化として、子どもたちに

は活動中の無駄話や無気力な態度を取るなどの「ダレ」が目立ち始めている。原田氏はこうした変化を被災者たちの「傷を受けた心」の叫びと捉え、「回復への一歩」であると理解し、支援活動においては、特に「子どもの心の回復」のために「基本的信頼」の回復を大切にしているという。最近では、こうした支援をより充実させるために、地域組織や学校等との連携が進められている。「子育てクラブ」をひとつの核として、避難者たちを暖かく包み込む「つながり」が地域に広がっている点に本実践の可能性が示されている。

2 「A君から学ぶこと」

北海道佐呂間高等学校 奥山 輝久

「特別支援の周辺」(障がいがあるかないかの「グレーゾーン」)にある生徒の進路(就職)指導をめぐる実践の報告である。

「グレーゾーン」の生徒の指導においては、「特に本人・保護者が」障がいを受け入れるか否か「など指導の過程に独特の困難が生じる。また、場合によっては生徒のためを思う配慮が、逆に本人の自立を阻害してしまうこともある。したがって、生徒を取り巻く諸主体(教師や保護者)が密に連携・協働し、この生徒にとつての「自立とは何か」を共に考え、生徒を支えていくことが必要となる。奥山氏が「学び」という表現を用い

ているように、生徒の現実には正面から向き合いながら「学び合おう」関係が、ここでの協働の本質と言えるだろう。

3 「南地区子育て支援ネットワークの取り組みについて」

稚内市立稚内南小学校 佐野 雅嗣

昨年度の稚内市東地区に続く、南地区の「子育て支援ネットワーク」の報告である。

この事例の特徴は「スクールソーシャルワーカー（SSW）」の存在と、家庭（保護者）も含めた支援を行っている点にある。SSWは教育相談所から派遣され、市内の小中学校を巡回し、ケアの必要な子どもに対応している。また、このネットワークでは子どもだけでなく保護者も困難を抱えている現状をふまえ、民生児童委員等とも連携し、保護者を励ましながら学校とつながることを重視している。家庭・地域の現状に向き合って実践されている本事例は、子どもを中心にした学校・家庭・地域の連携の現代的モデルのひとつと言えるだろう。

4 『『子育て体験交流広場』の取り組み』

むくどりホーム・ふれあいの会 石上 千草

さっぽろ子育てネットワーク 沢村 紀子

両報告者の所属団体が共同で実施している実践の報告である。

この実践は中学生の子育て体験を通して乳幼児親子と中学生の交流を図ろうとする取り組みで、二〇〇四年から続けられている。この事業の目的は、第一に中学生に向け、実際に乳幼児やその親たちと交流することで「子育てとは何か」を実感してもらうこと、第二に乳幼児を持つ親に向けて、将来わが子が迎える思春期を見通す子育てにつながることで、第三にその地域で生活する人々の互いの顔が見える地域づくりを目指すことである。現在では中学校の生徒会活動の年間行事にも位置づき地域に定着する取り組みとなった。そこは運営スタッフも含めたすべての参加者が交流し、学びあい、回復しあう場となっている。

5 「地域のコミュニティーとしての学校」

宗谷教職員組合枝幸支部 門脇 憲司

過疎集落における小規模校・枝幸町立問牧小学校の事例報告である。

小規模校においては、子どもたちが大きな集団になじめなくなることで、人数の制約上できない単元があるなどの困難性がある。この事例では、こうした困難性に「つながる学校」というコンセプトで対している。具体的には、授業や行事での近隣

小規模校との「つながり」、授業での体験学習や調べ学習における様々な産業・機関との「つながり」、地域と学校との合同行事における地域との「つながり」である。特に地域との「つながり」においては、子どもを中心とした地域コミュニティを学校を通して形成・維持しているといえる。

6 『二〇〇七全渡島教育研究会』から『みんなで「子ども」トーク二〇〇三』までの歩み

北海道函館商業高等学校 下間 隆雄

「同業者（教員）のため」だけでなく「すべての人」に開かれた研究会づくりを目指してきた取り組みの報告である。

研究会へ多様な参加者を集めるためになされた工夫は、第一に研究会名を「みんなで『子ども』トーク」としてイメージを親しみやすくする、第二に時事の話題・関心に即した魅力的な講演会の企画とテーマに関連した団体へのアピール、第三にデザインの工夫や新聞折込などチラシやポスターの充実と宣伝の努力である。現在のところは思うように参加者を集められてはいないものの、諦めずに発信を続けているという。学校・教員が、子どもを主役にしながら保護者や地域住民を巻き込んだ学びあいをつくり出そうとする点に価値があり、今後の発展が

期待される事例である。

7 「ミニ児童館を健やかに成長できる遊びと生活の場」
（札幌市本郷小ミニ児童館 野口憲一）

学校の校舎内に設置されている「ミニ児童館」の実践報告である。

「ミニ児童館」は学校の校舎内に設置されており、共働き世帯、母子・父子世帯の子どもが主な利用者である。校舎内に設置されていることで、インフォーマルな形ながら一定程度に学校との連携があり、何より子どもたちの放課後の安心・安全な居場所の確保を実現している点が注目される。

8 『はこだて子ども白書』づくりを通して

『はこだて子ども白書』作成委員会 小林 幹二

全国的にも例のない市町村レベルでの「子ども白書」づくりの実践報告である。

「はこだて子ども白書」づくりは、「多面的な視点から子ども・子育て・教育の現状をとらえ共有する目的」に市民主体の作成委員会によって作成された。子ども・保護者・教職員を対象とした大規模なアンケート調査と市内における多様な分野の

取り組みの寄稿から成っている。地域における子育て・教育を考え・行動するための基礎となる資料を市民の手により作成した、きわめて貴重な実践事例といえる。本事例に学ぶ「子ども白書づくり」の取り組みが各地に広がることが期待される。

一一 総括討論から

最後に、総括討論においては各レポートをふまえ、学校から家庭・地域へという視点と同時に保護者・地域や市民団体の側から学校を支える視点を持つことや、子どもを主役・中心にして大人・地域がつながることの重要性が改めて議論された。また、次年度以降の課題・論点として、さまざまに語られる「地域」の概念をどのように明確化し共有していくか、地域における「つながり」の重要性は共通認識になっているが具体的に「誰」と「どのように」つながる必要があるのか、についての議論を深めることが提起された。

(稚内北星学園大学)